

ドが1470年10月にランカスター側に寝返り、エドワードを追放してヘンリー6世を復位させた。エドワードは弟リチャード（のちのリチャード3世）を引き連れて反撃に出て、半年後の1471年4月に復位し、ヘンリーをロンドン塔に幽閉したのちに処刑した。

エドワード4世の死後、1483年4月に長男エドワード（当時12歳）がエドワード5世として即位するが、戴冠式を挙げるより早く退位させられ、ロンドン塔に幽閉された——このエドワードのその後の消息は不明であり、のちの時代にエドワードのものらしき遺骨がロンドン塔で発見されたが、確認はされていない。これはエドワード5世の叔父にあたる前述のリチャードが、兄エドワード4世の王妃エリザベスと対立したため、甥であるエドワード5世を1483年6月（即位してわずか二ヵ月後）に追放して自らがリチャード3世として即位したということである。シェイクスピアの歴史劇『リチャード3世』でもこのリチャードは、屈折した劣等感に突き動かされる狡猾で残忍な悪役として描かれている。（一方で『ヘンリー6世』においてヘンリー6世は、父ヘンリー5世やこのリチャード3世のような野心など微塵も持たない、控え目で敬虔な賢者に描かれている。）

悪人リチャード3世の天下も長くは続かなかった。1485年にランカスター家の流れを汲むヘンリー・テューダーが反乱を起こし、このボズワースの戦いに軍を率いて自ら出向いて行ったリチャードは落馬の末に戦死した。再び「ヨーク家のリチャードは戦争に赴き、失敗に終わった」のである。こうしてヘンリー7世が即位したことでヨーク王朝は終焉を迎え、その後120年近く続くテューダー王朝が始まった。このヘンリーはヨーク家のエリザベスを王妃に迎えることでランカスター派とヨーク派の和解を実現し、こうして三十年に亘る薔薇戦争は幕を降ろしたのだった。なお、リチャード3世は戦死した国王としては1066年にヘイスティングズの戦いで倒れたハロルド王（ノルマン軍が放った矢が目に刺さって死んだらしい）に続いて二人目であり、その後現在に至るまで「最後の」戦死した王である。

D.H.ロレンスの作品における動物の描写について (その2)

経営学部

山田 晶子

【兎】

前号ではきつねと馬について考察したので、今回は兎について考察をしようと思う。

D.H.ロレンスの作品に登場する動物のうちで、兎もかなり重要な動物であり、それが描かれている有名な作品がいくつかある。

まず、ロレンスの最高傑作と認められている『恋する女たち』(Women in Love 1920) の第18章「兎」を見てみよう。この章は主人公の1人であるグッドルーンという女性とジェラルドという男性が互いの関係を深める上で、登場する兎が大きな役割を働いている。

グッドルーンは、アーシュラの妹であり動物の彫刻を作ることを仕事とする芸術家である。彼女はショートランズという中・上流階級の館に、その娘であるウィニフレッド（小学生と思われる）の家庭教師に雇われてやってくる。ショートランズにはウィニフレッドの兄であるジェラルドがいる。彼は父親の後を継いで炭坑経営者になる男である。グッドルーンとジェラルドは、互いに相手が自分にとって重要な存在つまり恋人になるであろうと予感している。まだこの章では2人は深い関係まで進んでいないが、すでに接吻を交わしたことがあった。

さて、兎が2人の関係を進める上でどのように関わっているのであろうか。グッドルーンは、ウィニフレッドに絵を描かせるが、最初はルールーという名前の彼女の飼犬をモデルとして描かせた。この犬はすっかり人間に飼いならされてしまっている哀れな老いた犬として登場しており、作者はこのような犬の存在を惨めなものとして描いてい

る。一方で、次に絵のモデルとなる動物は黒と白の体色の兎で、この兎は名前がビスマルク (Bismarck) ということから想像されるように、強く猛々しい兎なのである。人物としてのビスマルクは、1815～98年に生きたドイツの政治家であり、ドイツを統一して鉄血宰相と呼ばれた。ロレンスはドイツの宰相ビスマルクを意識してこの兎を描いていることは明らかである。兎小屋からビスマルクを引っ張り出そうとしてグッドルーンは、暴れまわるこの動物に手首を引っかかれて赤い傷口が出来る。この兎は「悪魔あるいは魔物のように強い」、「体が長く、どこか竜を思わせる」ところがある、「獣のよう」、「雷雨のよう」と、繰り返しその凶暴性が述べられている。ロレンスは明らかに、このビスマルクという兎を人間に対立する性質を持った恐ろしい生き物として描こうとしている。グッドルーンが手首を引っかかれて激しい怒りに駆られた後で、ジェラルドが登場して、兎に一撃を加えておとなしくさせるが、彼もまた手首を引っかかれて赤い傷口を作られる。

この後、グッドルーンとジェラルドは、兎との事件を介して互いの運命的な係わり合いを感じるのである。グッドルーンの手首に出来た赤く裂けた傷口を見て、ジェラルドは彼女の本質を知ったかのように思う。それは兎が挙げた金切り声と重なって、グッドルーンの性的な姿をジェラルドに知らしめた。そしてグッドルーンは自分を彼にさらけ出したことを悟った。自分がジェラルドに服従するかもしれないという恐怖を彼女は感じたのである。一方で、ジェラルドは、自分が兎を一撃で静めたことから、グッドルーンに対する勝利者になれるかもしれないと思う。このような2人の思いが、2人の恋愛の支配と服従という関係を暗示しており、恋愛におけるそのような関係が「地獄」であることを作者は捉えているのである。ビスマルクという兎はこのように、『恋する女たち』における主人公の1組であるジェラルドとグッドルーンの在り様を象徴的に知らしめている。

また『白孔雀』(The White Peacock 1911) では、主人公であるジョージの一家を苦しめる存在として、彼らの農場を荒らす兎の群が登場している。ジョージの一家は農地を借りて農業を営んでいるのであるが、農場主は兎を狩ることを禁じて

おり、ジョージの一家は兎のために農業をやっていくことが出来なくなってしまう。兎はこの場合人間を苦しめる存在になっている。

更に『アドルフ』(Adolf 1920) という小エッセイでは、ロレンスは自分の子供時代を振り返って、父親が家へ持ち帰った子兎のうち生き残ったアドルフと名付けた子兎を野生の象徴として大切に描いている。アドルフはロレンスたちの父親の野性味と重ねあわされて、そこに憧憬の情が見られる。アドルフは結局自然の中へ返されるのであるが、ロレンスの自然への崇敬が見られる。

以上のように、兎は普通に考えられる「可愛い」という存在よりも、ロレンスにとってはむしろ「神秘的な」存在として捉えられていると思われる。